

# おじさんの青春日記 ～その5～

プロフェッショナル

## 第一章 回想 大和古寺風物誌

私が十代の後半を送った高等学校は、広島市内から電車で三十分ほどの郊外にあった。中学校に入学した直後の六月、父を病気で失ったこともあって、その頃何週間も特別な理由もなく学校を休んでいたことがあった。「不登校」のはしり、だったのかも知れない。街なかの喧騒がそのまま教室に伝わってくるような、殺伐とした校内。無気力な教師や狡猾な生徒の横行する中学校に、私はどうしても馴染むことが出来なかった。

進学した高校は何より、豊かな自然に囲まれていた。瀬戸内海の潮風が心地よく吹きわたる広大な敷地。葦（あし）の茂みに囲まれた広いグラウンドのそばにポプラやメタセコイヤの並木道があり、何十種類もの輝きの異なる緑のなかに、さながらサナトリウムを思わせるような木造の校舎が点在していた。私はしばしば授業を抜け出して海岸で貝掘りをしたり、近くの丘に登って昼寝をしたりしていた。

同級生には近在で農業や漁業を営む家の子供も多かった。彼らは歳時記どおりの農作物の話や、海で働く両親の潮の匂いを教室に運んできた。模擬試験の成績が県下一番という女生徒もいれば、無断で学校を休み、自転車を駆って何日も無銭旅行に出かける強者（つわもの）もいた。

井上先生という小柄な校長先生が毎朝の朝会で、十代の私達には難解な哲学的な箴言（しんげん）や理想をいつも口にしていた。その校長先生からはなぜか、些事にわたる小言や叱責を聞いた記憶がない。

私はこの高校で、よみがえったように高校生活を送っていた。

学校のほぼ中央に藤棚と芝生で囲まれた瀟洒な図書館があった。高校生の私はここで初めて、文芸評論家・亀井勝一郎の著書にふれた。

『大和古寺風物誌』、『我が精神の遍歴』、『私の美術遍歴』。

三センチほどもある厚い本にビッシリと旧仮名使いの活字が埋まった本であったが、ページを繰るごとにその内容の面白さに惹かれていった。

さまざまな文芸作品や社会現象を自己の思想と重ね合わせながら評論していくという手法に、私は未踏の道に足を踏み入れるような新鮮な興奮を覚えた。

秀れた小説や著作も、視点の異なりによってプリズムのようにさまざま多様な光を放つ。

「他を語るなかで自己を語る」文芸評論は、論理展開と構成の面白さ、形式にとらわれない奔放な創造の世界のように思えた。

とりわけ、聖徳太子をはじめとする奈良仏教にまつわる亀井勝一郎の評論は、私にとって七世紀、八世紀の日本へ遡（さかのぼ）る水先案内人のようであった。

仏閣に今も残る仏像はあくまでも瞑想的で、ただ合掌するのみだが、当時、社殿や仏像のすぐほとりで展開された政治や人間模様は、血にまみれ、骨肉相食む凄絶なものであった。

西暦六 四年に制定された、聖徳太子の十七条の憲法が机上の理想として生まれたものではなく、朝鮮半島からの渡来人や倭人（わじん）入り乱れての、夥（おびただ）しい流血の果てに成文されたものであったことをその頃知った。

亀井勝一郎は明治四 年（一九 七年）、北海道函館で屈指の資産家といわれる銀行家の家に生まれた。

病弱な生母にかわって勝一郎を可愛がった祖母アサは熱心な浄土真宗の信徒であったが、生家のすぐ隣が函館カトリック教会、近くに聖公会教会、日曜日にはメソジスト教会に通うという和洋の魂が交錯する、エキゾチックな環境のなかで幼年期を送った。

その生家は今も残っていて、函館の町特有の坂道の途上にある。近くの高台に登ると、函館をとりまく荒涼たる外海を見渡すことが出来る。

東は太平洋、西に日本海。函館はこの二つの大海を結ぶ津軽海峡に面していて、北海道の玄関口であると同時に、安政年間に日本で初めて西洋料理店やビヤホールが開業するなど、さまざまな開明的な文化が芽吹いた町でもある。

十歳の時に勝一郎は生母を亡くす。

彼が十三歳、ある雪の朝のこと。暖かな外套に身を包んだ勝一郎が、家族とともにまさに外出しようとしていた時、玄関の扉を叩く音がした。

雪の降りしきる戸外に立っていたのは、地下足袋を履いた電報配達少年であった。

電報を受け取りに出た勝一郎は、その少年が小学校の時の同級生であることに気付く。偶然の再会であった。

手袋もせず、赤くかじかんだ手でその少年は電報を勝一郎に手渡す。

二人ははにかみながら微笑し、まぶしげに互いの姿を見つめあった。

その少年は、無邪気に勝一郎に話しかけた。

「君はいいなあ」

と。

勝一郎はその時の情景が、彼にとって何かの傷跡のように後生にまで残ったと書いていく。

そして彼はその同級生の言葉に対して、その時口にはせずとも咄嗟（とっさ）に答えるべき言葉をその脳裏のなかに持っていたというのである。

彼にとつてその弁明の言葉とは、

「一切は空（くう）だ」

という言葉であったというのだ。

十三歳の少年が、である。

彼はその時の情景を青少年期のひとつの原点と回顧している。

そののち、亀井勝一郎は東京大学美学科に進むが、大学在学中、プロレタリア文学活動などによって検挙され、二年余を獄中で過ごしている。

マルクシズムから転向した亀井勝一郎は古典と民族精神の研究に浸り、ついには親鸞に傾倒していく。

仏教思想と仏教美術に心を奪われた亀井勝一郎は古典論、日本人論を展開し、昭和十八年、奈良の古寺巡礼をまとめた『大和古寺風物誌』を執筆している。

獄中で転向しマルクシズムを捨てて古典や古代の美に逃れた、と当時や後世の批評家は非難するものもあったが、彼は飄然（ひょうぜん）としばしば大和路を歩き、日本人の心のふるさとともいえる地に多くの思想のヒントを見いだしたのである。

日本が戦いに破れ、国土は疲弊し、国民が失意の底にあったとき、亀井勝一郎は爆撃から奇跡的に免れた奈良、大和路をさまよい歩いて、日本文化の揺り籠の地から精神の再生を唱えたのである。

亀井勝一郎の大和（やまと）についての著作には、彼が幼少の時を送った函館を想起させる濃厚な海外文化の香りがあつた。

太平洋戦争中、日本軍政の支柱となつた国粹的、狭隘な「大和魂」ではなく、古代中国やインド、イタリア、ギリシャ、朝鮮、近代ロシアなどからもたらされた複合的なユーラシア文化に色どられていた。

十七歳の夏休み、私は無謀にも亀井勝一郎氏に手紙を書き送った。

亀井氏の著書への感想文に加え、受験校さえ決まってもいないのに、

「来年春、東京の大学へ入学するので（武蔵野市の自宅に）下宿させてほしい」

という唐突な依頼を書き添えたものだった。しばらくして、氏から返書が届いた。

豊かな毛筆文字の踊る、

「東京へ出てきたら遊びにいらっしやい」

という葉書だった。

高校生の私は有頂天になった。

机上においた葉書を朝に夕にながめつつ、勉強そつちのけで亀井勝一郎や小林秀雄の評論を読みふけり、飛鳥、白鳳時代の仏閣や仏像の研究書をひもといた。

その年、秋も深まった十一月。文芸評論家、日本芸術院会員、亀井勝一郎死去の報を新聞で知った。

どれほどのショックであったことか。

私への返書は壮絶なガンとの闘いのさなかに書かれたものであったことを、のちに訪れた亀井氏宅で未亡人の斐子夫人から聞かされた。

「病室であなたからのお便りを読んで、おもしろい青年だねえ」って、主人、笑ってましたよ」

斐子夫人は井の頭公園の隣にあった亀井氏宅の仏間で、看病疲れで失明寸前の眼を閉じたまま話してくださった。

亀井氏は死の直前まで、日本文化の源流ともいえる古代中国文明への憧れと、当時国交のなかった中華人民共和国との修交を熱く語り続けていたという。

昭和四三年秋、亀井勝一郎氏の三回忌にあたって斐子夫人から頂いた、歌人でもある夫人による追悼の歌集、「終い薔薇」が私の書架に残っている。

洋ふたつ望みてはるか下北もけぶるとふ函館山裾に住む

石舞台きみと行きたる大和路に似る筈もなき吉野川辺に

み仏となりにしひとが書かせたる親鸞の道は切なくて読む

亀井斐子

私の東京生活は亀井勝一郎の死に始まり、一九六一年の日米安保条約騒乱に匹敵する大学騒擾（そつじょう）のうちに過ぎ、三島由紀夫の壮絶な割腹自決をもって終わった。

太平洋戦争敗戦後ちょうど四半世紀を経て、アメリカプラグマティズム（実用主義、成果主義）の津波をかぶった日本の伝統的な精神文化が、変質を露（あらわ）にし始めた時代だった。

少し長くなるが、日本敗戦の年、昭和二十年（一九四五年）秋に書かれた亀井勝一郎著『大和古寺風物誌』のなかから

書簡

古都の友へ

君とともに斑鳩（いかるが）の里を巡ってからもう三年の月日が流れた。その後も春と秋には大和を訪れ、夢殿に詣でたいと願っていたが、空襲は激しくなり、やがて終戦したものの旅はいつそう窮屈となって、昨年と今年はどうとう古寺巡礼を中止せざるをえなかった。この間、僕は東京郊外の茅屋に蟄居して、息づまる思いで世の激しい転変を眺めていた。

東京はおおかた廃墟と化した。昨日までは栄華をきわめていたものが、劫火に家を失って、たちまち路頭に迷い、権勢を誇った武将たちは、今日は捕われの身となって都大路を引かれて行く有様をみると、さながら『平家物語』の世界にあるような気がする。終戦後の僕の感想は、『夢かと思ひなさんとすれば現（うつつ）なり、現かと思へば又夢のごとし』という言葉につきる。

全く諸行無常だ。しかしさすがに自然はありがたい。暴雨に呪われた幾日かをすぎ、いまようやく透明な秋空が現われてきたところだ。

蜻蛉の飛びかう空を眺めていると、まるでなにごとくもなかったかのように平和である。そぞろ旅を思い、大和がなつかしく回想される。斑鳩の里の刈入れは終わったろうか。はるかに君をしのび、こんなとりとめもない手紙を書くのである。

空襲が激化し、朝夕にわが都市が崩壊していったころ、奈良もやがてはこの運命を免れまいと僕は観念していた。夢殿や法隆寺や多くの古寺が、爆撃のもとにたちまち灰燼と帰す日はまちかいと思われた。戦いの終わったのち、その廃墟に立ち、わずかに残った礎の上になかななる涙をそそぐであろうか。そういう日に、なにによって悲しみに堪えようか。自分の悲歌の調べを予想し、心の中であれこれと思いめぐらせてさえいたのであった。国宝級の仏像の疎開は久しい以前から識者のあいだに要望されていた。東大寺や薬師寺の本尊のような大仏は動かしえぬにしても、救世観音や百済観音などは疎開可能であろう。

しかし、僕は仏像の疎開には反対を表明した。災難がふりかかってくるからといって疎開するような仏さまが古来あつたろうか。災厄に殉ずるのが仏ではないか。歴史はそれを証明している。仏像を単なる美術品と思いこむから疎開などという迷い言が出るのである。そう思ったので僕は反対した。

天平の東大寺は平重衡の兵火にかかって、けなげにも焼けていった。大仏も観音も弥勒も劫火に身を投じた。これが仏の運命というものではなからうか。なにを惜しむ必要がある。惜しむのは人の情であるが、仏は失うべきなものをも有せざるがゆえに仏である。

夢殿や法隆寺に蔵されている多くの古仏が、爆撃の犠牲になるのは実に痛恨事にちがいないが、だからといって疎開を考えるのは、信仰にとつて感傷的なことではなからうか。仏の心に反する行為かもしれない。そう思って、僕はただ堪えることを考えていた。

無慚な壊滅に堪えうるかどうか。それはわからない。しかし一心に念じて、惨禍の日を忍ばうと覚悟していた

《大和古寺風物誌 斑鳩宮》より

亀井勝一郎をガンで失つてのち、私は何度も一人で奈良の路を歩いた。京都のざわめく華やかさに比べ、奈良はあふれる観光客のなかにも盆地を囲む穏やかな山々や丘が喧騒を吸収してしまふ。町はずれに行くと、先々に古代の静謐（せいひつ）が漂っていた。

温かく、いつでも迎えてくれるような古代の平野が視界にひろがっていた。

結婚して六年目、一九八二年（昭和五七年）の初夏。

私はその年の早春に生まれた長女、萌（もえ）を生後わずか六ヶ月という短命で失った。「乳幼児突然死症候群」。あつけない、娘との別れであった。

いわはしる たるみのうえのさわらびの 萌えいづる春になりけるかも

「萌」、という名は志貴皇子（しきのみこ）の清冽な早春の歌にちなんで、私が名付けたものだった。

萌を失つて二ヶ月後、私は妻と当時五歳の長男をともなつて真夏の奈良に入った。

それぞれ語り合う言葉も少なく、胸塞ぐ同じ思いをもつ三人の家族は、神社、仏閣をめぐり歩いた。東大寺、二月堂、三月堂、薬師寺、中宮寺。

妻は訪れる寺院の伽藍すべてで長いあいだ頭を垂れ、手を合わせた。先々に喜捨（きしや）を置いた。

当時、幼稚園児だった長男は、あれほど可愛がっていた妹を失つて傍目にも傷ましいほど悄然としていた。葬儀のあと、火葬場で彼は小さな小さな棺を前にして、

「焼かんという、焼かんという！」と泣きじゃくった。

私たちは彼をただ抱き締めることしか出来なかった。

妹の死は彼の幼心に拭いがたい虚無と無常を植え付けた。それは彼の成長の折り節で、錐（きり）のように鋭敏な感覚となつて現われることがあった。

陽の盛る青春の時代においても、彼は陽が陰る落日のときを遠くに見ているような性向があった。

妻は萌を保育園に預けて、結婚前からの職場に勤め続けていた。生まれ落ちてわずかのうちから、雨の日も、風の日も、雪の日も、朝早く乳児の萌を腕（かいな）に抱き、外套（がいう）にくるんで勤めに出た。勤めを終えた彼女は一目散に保育園に寄り、萌を抱いて家路を急ぐのである。

新たな起業に苦心する私は、彼女がこうして母子で働いて貯えた預金を事業資金にと奪うことがあったのだ。文句ひとつ言わず、むしろ彼女は進んで私に従った。

私たちは寺院をめぐる巡礼の家族のように、ひたすら堂宇をたずね歩いた。

草深い奈良はあくまで暑く、蝉の声に沸き立つようだった。奈良の、古代からある土道に陽炎（かげろ）がたった。



西大寺から京都に出て、繁華街の店で家族三人言葉少ない夕食の卓を囲んだとき、めまいがするような京の暑さのなかで、  
『夢かと思ひなさんとすれば現（うつつ）なり、現かと思へば又夢のごとし』、来世をさまよったのち、重い石を背負ってまた現世にたどり着いたようなひどい疲れにおちいついた。